

鹿児島の動物43

カスミサンショウウオ

動物担当 池 俊人

12月から3月頃の冬の季節、出水平野近くの水田などでは、下の写真のようなものが見られることがあります。バネのようにくるくる巻いた長い袋の中に、細く小さいものがたくさん入っていますね。これは一体何でしょうか。



卵のう

これは、カスミサンショウウオの卵が入った「卵のう」です。そして、上の写真の卵のうに入っている1cmほどの細長いものは、ふ化間近の胚なのです。カスミサンショウウオは、カエルやイモリと同じ両生類で、たくさんの卵が包まれた卵のうを、水中に産みます。卵のうはコイル状に巻いた細長い形をしていて、1対あります。中には数十個から数百個の卵が入っています。

産卵直後の卵のう
(水から取り出して撮影)

産卵から数週間たつと、ふ化した幼生が卵のうから出てきます。幼生の首の横にはえらが出ていて、ここで呼吸をしています。以前、カスミサンショウウオの幼生を飼育した時に、大型の個体が小型の個体を食べる「共食い」を観察しました。そこで、大きさ別に幼生を別容器に分けて、



首の横にえらをもつ幼生

飼育した経験があります。通常はミジンコなどの小動物を食べて育ちますが、おそらく自然界でも、幼生どうしが共食いすることは、珍しくないのだと思います。



成体

数か月の幼生期間が終わると、えらがなくなって肺呼吸をするようになり、変態して上陸します。陸上では主に森林の林床などで潜んで過ごすので、人目につくことは滅多にありません。

カスミサンショウウオが県内で見つかったのは、1988年のことです。その後、たくさんの人が調べて、県内では出水平野の西部（出水市西部と阿久根市の北東部）だけに分布することが



県内の分布域（黒色部）

が分かりました。西日本に広く分布するカスミサンショウウオですが、この地方が国内の南限分布として貴重なので、県指定天然記念物にも指定されています。

残念なことに、以前カスミサンショウウオがすんでいた場所でも、現在は見られなくなってしまった場所もあります。カスミサンショウウオが生きていくには、成体のすみかである森林と、産卵場や幼生のすみかである湿地や水田が必要で、なおかつ、その間を行き来できる必要があります。このような環境が、今後も保たれるようにしたいものです。



産卵場の環境（出水市高尾野町）